

若き漱石—夏目漱石の正岡子規への手紙を読む—

武田 充啓

Soseki on adolescence:

Reading NATSUME Soseki's personal letters to MASAOKA Shiki

Mitsuhiro TAKEDA

夏目漱石と正岡子規が交換しあつた書簡を中心に読みながら、作家になる以前の漱石が人間や人生に対してどのような見方や考え方を、思想をもっていたかを確認する。出会いの当時の彼ら二人には共通して性に対するロマン的な態度が窺える。また彼らのすれ違いからはそれぞれの思考の特徴と文学に対する姿勢の違いが読みとれる。子規は問題を外へと展開させるかたちで問おうとし、「自信」と「孤立」を抱えた漱石は問題を論理的かつ分析的に解こうとするのである。また「孤立」は漱石を厭世的にし、利他的行動を誘発するが、二人の漢詩のやりとりから将来への展望のあるなしの違いを見る。続いて漱石の嫂登世に対する人物評から、漱石の人間観や「生来」と「教育」に対する弁証法的な考え方を探り、最後に人生に対する態度の違いを浮き彫りにする。漱石は「有用の人」であろうとした人であると同時に「食ツテ居レバソレデヨロシイ」と考える人もあつた。

はじめに

夏目漱石と正岡子規との交流のなかから、とくには子規と交換しあつた書簡に残された言葉を中心に、作家になる前の漱石の人間や人生に対する見方や考え方を、すなわち漱石の思想を確認しようとするのが本稿の趣意である。

漱石が自伝的な小説『道草』（大正四年）を書いたのは晩年である*1。その『道草』には、「遠い所から帰つて来」た主人公健三が、すでに十数年前に縁を切つたはずのかつての養父島田や養母お常から、それぞれに金を無心される場面が描かれている。養父母だけではない。一族の誰もが健三（の収入）を「活力の心棒」として頼るのである。小説の最後で健三は「向後一切の関係を断つ」ことを条件にまとまった金を島田に渡す。それで「すっかり片付いちやつた」と「安心」する妻のお住に対して、健三は「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ」と返す。ここには人と人との関係や運命が（片付かない）ものとしてとらえられ、それが主人公の言葉として置かれているが、それはまた作家漱石自身の思想でもあるだろう。

むろん小説は作家の思想を直接に表現するものではないが、作品のうちに何らかのかたちで作家自身の思想が反映されるものである。夏目漱石という作家の思想が形成されるにあたっては、その幼少体験（養子に出されたこと、母親や兄たちの死など）、大学院までの教育経験（教師たちや友人たちとの交流）、松山や熊本での中学校や高等学校の教員としての職業経験、留学とその前後の大学教員としての生活などは、それぞれ大きな影響を与えているに違いない。

『道草』は、互いに理解し合うことが困難な夫婦生活を軸に、養子に出され、留学し、大学教員になつたことなどの漱石自身の経験を題材にした小説であり、漱石がやがて作家となるまでの自己確認の物語としても読める作品である*2。自身の過去を題材に

した小説『道草』に見られる、この世界に一度生じたものは（あるいは形を変えてでも）継続する、とする見方考え方を漱石自身の思想として仮定しておいたうえで、この思想が、当の漱石に生まれたあれこれの思想自身に対しても当てはまるのか、すなわち、漱石その人に一度生じた思想は表現を変えてでも生涯継続したのかどうかを確かめたい。

ここでは、作家になる前の漱石にどのような思想があったかを考えることで、その言葉が表現された時点で、漱石にそういった思想があったと確認するだけでなく、彼が作家となって以降も、それらの思想が、あるいは表現を変えてでも継続したかどうかを吟味するための参考としたい。このことは漱石のうちに存続している作家以前の思想が、個々の作品のなかで、どのように表現され、どう継続しているかを考えるための前提になるだろう。

一 正岡子規との出会い

まずは漱石と子規の出会いを通じて、二人の性に対する態度を確認しておこう。漱石と子規は同い年（慶応三年生まれ）であり、共に明治十七年に入学した東京大学予備門の同級生でもある。子規は明治十八年に落第したが、漱石も翌十九年に病気で原級に留まったため、二人は同年（明治二十一年）に第一高等学校本科に進学した。漱石と子規との友人としての親密な交流は明治二十二年一月に始まるとされる*3が、その出会いが具体的にどのようなものであったのかはよくわかっていない。互いに一致した趣味であった寄席通いが、そのきっかけの一つとなったであろうと推測されている*4。

漱石は明治十四年に母千枝を亡くし、明治二十年には長兄大助、次兄直則を相次いで亡くした。翌二十一年、夏目家に復籍している。一方子規は前年（明治二十一年）夏頃から取りかかっていた『七草集』をこの年の五月一日に脱稿したが、その八日後の五月九日夜に咯血し、翌日作句して自らを「子規」と号した*5。五月十三日には漱石が子規の病床を見舞い、その日のうちに現存のものでは子規宛最初となる書簡を投函している。漱石は五月二十五日にも子規を見舞い、『七草集』に評を付して返却した際、そこに初めて「漱石」と署名した。

こうして明治二十二年五月が、「子規」と「漱石」との最初の出会いということになる。子規がいつ頃『七草集』*6を漱石に見せ、批評を乞うたのかは不明であるが、「漱石」は実は子規も自身のために用意していた雅号の一つであったらしい*7。二人が共に同じような自己認識をしていたことは興味深い。彼らが近づきあえた原因の一つに、互いに似た者同士であったということがあるのではないか*8。ともあれ子規と漱石は急速に近づきあった。

漱石は子規の咯血に大いに驚いたことであろう。実際、五月十三日付の子規宛書簡

では、見舞いの後に山崎なる担当医を訪ね、病状や療養法を確認したことを記した上で、「第一医院」（医科大学付属病院）への入院を勧めている。そして「只今は極めて大事の場合故出来るだけの御養生は専一と奉存候」*9と親身に子規を気遣い、その末尾に漱石は英語で「To live is the sole end of man!」と添えた。生きることは人間の唯一の目的であるという意味の言葉である。

二人は互いに若かった。生と死に対する敏感な感受性には、当然性に対する興味や関心も伴っていた。子規の『七草集』を回覧した友人たちが、どの巻にいちばんよく反応したかを見ても、その一端が窺えるだろう。たとえばドナルド・キーンは、その子規の評伝の一章で、謡曲を擬した作品である「葬のまき」を探りあげ、内容をやや詳しく紹介したうえで、子規が二三の友人たちに「面白いと思ったものを尋ねたところ、誰もが「葬のまき」を挙げたことに注目し、漱石の「評」についても、末尾に付した九首の七言絶句のうち、次の詩だけを引用している。

長命寺中醫餅家 長命寺中 餅を齧ぐ家

当嬢少女美如花 嬢に当たる少女 美しきこと 花の如し

芳姿一段可憐処 芳姿一段 憐れむ可き処

別後思君紅涙加 別後 君を思うて 紅涙加わる *10

明治二十一年の夏、子規は『七草集』執筆のため向島にある長命寺の境内にある桜餅屋月香楼に三ヶ月近く滞在した。第一句集『寒雷』において「糸瓜忌や子規全集に恋あらず」*11と詠んだのは加藤楸邨であるが、キーン氏がここで内容紹介と漱石の漢詩の引用だけで、子規の恋愛について直接触れないで済ませているのは、氏もまた楸邨と同じく子規に恋愛はなかったか、あったとしても採りあげるほどではないと考えているのである。『葬のまき』の花子は月香楼の娘おろく（「お録」または「お陸」とも）がモデルだとされる。子規とおろくとの関係が噂になったのは事実であるらしい*12。しかし子規自身はこれを否定するために『七草集』（刈萱のまき）を書いたとされる*13。

では真相はどうであったのか。たとえば復本一郎は、「女郎花の巻」所収の和歌や高浜虚子の小説『柿二ツ』（新橋堂、大正四年五月）にある記述などを傍証としつつ、「刈萱のまき」にある「そハ我身の片思ひ」という言葉に注目し、二人の関係が「根も葉もないこと」であったと見ている。《子規が月香楼の「娘」に好意（あるいは好意以上のもの）を寄せていたのは明らかであろう。だからこそ若い、「正直」で「真面目」な子規としては、是が非でも「雪冤」の文章を書いておく必要があったのであろう》*14という至極妥当な推察に同意したい。

子規と次第に親しむようになった明治二十二年、八月に漱石は学友たちと房総に旅し、それを漢詩文集『木屑録』にまとめた。十月、帰京してそれを讀んだ子規は巻末

に「評」を付し、「於是乎余始得一益友其喜可知也^{*15}（是に於てか、余は始めて一益友を得たり。其の喜び知るべきなり）」と述べたが、『筆まかせ』にもその詩の幾節かを掲げて褒めている。

たとえば「濤勢蜿蜒、長而來者、遭礁激怒欲攫去之而不能、乃躍而超之、白沫噴起、与碧濤相映、陸離為彩」に見られる修辭が「漢文に未だなかるべく」（と子規は思つたようである）。「英語にいゆる personification なるもの」であり、「実に一見して波濤激礁の状を思はしむ」と英語に長じた漱石ならではの表現と評し、「山僧日高猶未起、落葉不掃白雲堆」などの句を含んだ「羅漢を見し時の詩」には「曲調極めて高し」「豈畏れざるを得んや」と述べ、また第三句に「寒砧和月秋千里」とある「客中憶家」と題する詩に対しては「この詩の如き真個の唐調にて天衣無縫ともいはんか」と激賞している。そして末尾に『筆まかせ』に採りあげた理由を次のように記すのである。

余の経験によるに英学に長ずる者は漢学に短なり 和学に長ずる者は数学に短なりといふが如く 必ず一短一長あるものなり 独り漱石は長ぜざる所なく達せざる所なし、しかれどもその英学に長ずるは人皆これを知る、而してその漢文漢詩に巧なるは人恐くは知らざるべし^{*16}

漱石は子規の『七草集』『葬のまき』がフィクションであることを理解しつつも、なお次のように評していた。

嗚呼、天地一大劇場也。人生如長夢。然夢中猶弁声色、俳優能泣人。僕読此篇、雖知其出妄想、然不能無酸悒之情。況於身在其境、目睹其事乎。

（嗚呼、天地は一大劇場なり。人生は長夢の如し。然れども夢中に猶お声色を弁じ、俳優能く人を泣かしむ。僕、此の篇を読み、其の妄想に出づるを知ると雖も、然れども酸悒の情無き能わず。況んや身其の境に在りて、目其の事を睹るに於てを乎。^{*17}

「況んや」以降は、あくまでも想像の延長であつて、決して現実の子規の立場を慮つたものではないと思われるが、それにしても強い切実さははらんだ言である。漱石と子規の出会いをこうして見てくるかぎり、二人はお互いに現実の恋愛とは無縁の生活をしていたようである。後の作家漱石自身の言葉で言えば、「夢中」の「俳優」や「声色」こそをリアルなものとして生きているこの時期の二人は揃つて「極めて高尚な愛の理論家だつた」のであり「同時にものつとも迂遠な愛の実際家だつた」(『こゝろ』下三十四)とも言えよう。

明治二十二年九月二十七日付子規宛書簡など、漱石と子規は互いを男女の関係に擬えた「妾」「郎君」と呼び名乗りあつた文のやりとりもしている。あるいは「恋に上

る階段なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の「互いの「所へ動いて来た」(『こゝろ』上十三)」のだったのかもしれない。

二年後の明治二十四年七月十八日付子規宛書簡では、その末尾で当時通院していた井上眼科で子規には以前から話していた「銀」杏返しに竹なはをかけ「た少女を偶然見かけたことを子規に伝えているが、その前段に自分が女なら「青楼へ身を沈めて」でも、と子規の学資を心配してみせる次のような記述がある。自身の痘痕面を意識して戯称した「凸凹」の署名がある手紙である。

それについても学資上の御困難はさこそと御推察申上候といふまでにて、別段名案も無之、いくら僕が器械の龜の子を發明する才あるも開いた口へ牡丹餅を抛りこむ事を知つて居るとも、こればかりはどうも方がつきません。それも僕が女に生れていればちよつと青楼へ身を沈めて君の学資を助るといふやうな乙な事が出来るのだけれど……それもこの面ではむづかしい。

二人が出会つた当時は、漱石にとつても子規にとつても、性こそはその欲望の中心にあつたはずのものであり、その意味では切実なものであつたに違ひなく、その切実さは、とくに漱石にとつては、のちに『漾虚集』に収めた作品などから明らかのように浪漫主義へと赴くほどのものであつたと思われるが、現実世界では空想的なものにとどまるものであつた。

二 正岡子規との距離（外交と内省）

次に漱石と子規のすれ違いを通じて、それぞれの個性、思考の特徴、文学に対する姿勢の違いを見てみよう。明治二十二年十二月三十一日付子規宛書簡は、彼らの親密さの度合いがかなりのものとなつていたことを如実に伝えている。子規は小説を書くつもりであることを漱石に伝えていたようである。しかし「御前兼て御趣向の小説は已二筆を下し給ひしや。今度は如何なる文体を用ひ給ふ御意見なりや。委細は拝見の上逐一批評を試むるつもりに候へども、とかく大兄の文はなよくとして婦人流の習気を脱せず」といきなり子規の文章の欠点を容赦なく指摘した漱石は、続けて次のように書く。間違えづらいに交際も終わりがねない筆鋒の鋭さである。

故に小生の考にては文壇に立て赤幟を万世に翻さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず。思想中に熟し腹に満ちたる上は直に筆を揮つて、その思ふ所を叙し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず。文字の美、章句の法などは次の次の次に考ふべき事にて Idea itself の価値を増減スルほどの事は無之やうに被存候。御前も多分この点に御気がつかれるるなれば去りと

て御前の如く朝から晩まで書き続けにはこの Idea を養ふ余地なからんかと掛念仕る也。勿論書くのが楽なら無理によせと申訳にはあらねど毎日毎晩書て書き続けたりとて小供の手習と同じことにて、この original idea が草紙の内から霊現する訳にもあるまじ。

「婦人流の習気」「小供の手習」などと手厳しく批判されたうえに、「伏して願はくは」「手習をやめて余暇を以て読書に費やし給へよ」「手習をして生きてあても別段馨しきことはなし」などと忠告された子規は、当然間を置かず反論を認めたことであろう。しかしその返書は残っていない。ただその後の二人のやりとり^{*18}を見ると、失われた子規の返書のおおよそは窺える。

ここでは深く立ち入ることはできないが、漱石は文章形成の二大要素として「Rhetoric」と「Idea」を採りあげ、それぞれの良し悪しの組み合わせを網羅した上で論理的に「Idea」こそが重要だと結論している。対して子規は、読む本がない、何を讀んでいいかわからない、英文は読めないなどと言いつつ、返書で漱石からその怠惰な姿勢を窘められている。議論も自身は「Rhetoric」を重視しながら、その根拠を十分には示せないどころか、矛盾する言葉まで書きつけている。

このやりとりが議論だとすれば二人はかみ合っており、論争ならば子規に分がなく、助言とするならば結果的に子規は漱石のそれを退けたことになるだろう。しかし、ここで重視したいのは、このやりとりの文学史的意義（文学表現における「内容と形式」問題の先駆け）でもなければ、議論の優劣でもない。

たとえば栗津則雄は《ここで重要なのは、漱石においても子規においても、Idea や Rhetoric が、単なる文芸上の概念にとどまるのではなく、人生に対する彼らの態度そのものとかかわっている点なのである》とし、次のような指摘をしている。

たとえば漱石の場合、彼がこのように表現における Idea の役割を重視するのは、彼が表現における内容主義者であるとか主題主義者であるとかいうことに尽きるものではない。それは彼が、おのれの思考とおのれを取り巻く社会とのあいだに、或る本質的な不和を感じていたせいだろう。このようなとき、人は、おのれの思考の独自性を、おのれの存在を支えるものとして固執せざるをえないのだ。^{*19}

栗津氏は、「Rhetoric」は社会共通の美的理念に支えられざるを得ず、筆者も読者も共に含んだ共通の趣味の場とでも言うべきものが要請される。その点から見て、《漱石は、おのれの思考が、Rhetoric から切りはなされた、あえて言えば Rhetoric を超えたものであることを、秘められた、あるいは無意識の要求として、心に抱いていたと言つてよい》とし、子規にはそのような意味での《孤立》はなかったと考えている。子規の場合、《衝突も批判も、外部との合体の一形式であると言いたいようなところ

がある》とし、それはひとつには「彼の生まれつき」のせいであり、またひとつには彼の「短命の予感」のためであると見る。

子規は翌二十三年の歳始書懐の詩を次のように作った。

繫將生命細如糸	繫ぎ將つ生命、細きこと糸の如し
啼血三旬号子規	血を啼くこと三旬、子規を号す
不敢紅塵衣帶漉	敢て紅塵に衣帯を漉さず
猶期青史姓名垂	猶ほ期す青史に姓名の垂るゝを
廿年人事幾甘苦	廿年の人事、甘苦幾たびか
五尺病軀多盛衰	五尺の病軀、盛衰多し
遮莫東風又新歲	遮莫（さもあらばあれ）東風又た新歲
且陪諸友共傾卮	且く諸友に陪して共に卮を傾けん ^{*20}

栗津氏は、子規の「短命」の《予感》を彼を孤独にしたが、それは《外部との触れあいを阻んだり歪めたりするふうには働かない》。むしろ彼を《書くことへかり立て》しかも《いつそう外部へ心を開く》かたちでそれを行った。それが子規独特の点だとするのである。これならつて対照的な言い方をすれば、漱石の《孤立》は、彼を讀むことへかり立て、いつそう内部へ心を閉じる方向に導いたということになるだろうか。

のちに明治二十八年十二月十八日付子規宛書簡で「小生は教育上性質上、家内のもとの気風の合はぬは昔しよりの事にて小兒の自分より「ドメスチック ハッピーネス」などいふ言は度外に付しをり候へば、今更ほしくも無之候」と書いたように、漱石には「猶期青史姓名垂」とする「家」も「且陪諸友共傾卮」とする「友」もなかった。漱石は子規と出会い親しんだが、その子規とでさえ共有できないものを抱えていた。それは、少なくとも漱石が学者や教師としての生活を続けている間は、依然彼のうちに抱えられたままであったと考えられる。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなるほど、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼は臍氣にその淋しさを感じる場合さえあった。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それがかえって本来だとはかり心得ていた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思わなかった。（『道草』三）

私たちはここで改めて漱石の「自信」と共にある彼の「孤立」を確認しておこう。

それは漱石の人生や世界に対する態度を決定しているものであり、子規との埋めることのできない距離を際立たせるものでもあった。

三 正岡子規との距離（厭世と乱暴）

「孤立」は、漱石に自縛自縛的な身悶えを強いしたが、ここではそれへの子規独特の励まし方と二人の漢詩のやりとりから互いの将来についての展望の違いを見る。

漱石の「孤立」は、たとえば厭世のような姿勢として顕れた。明治二十三年、二人はそろって第一高等中学校を卒業し、漱石は文科大学英文学科に、子規は同哲学科に入学する。漱石は眼病に苦しんだ。七月二十日付子規宛書簡には「何の因果か女の祟りかこの頃は持病の眼がよろしくない」とあり、八月九日付子規宛書簡でも「眼病とかくよろしくならず」とある。そして「この頃は何となく浮世がいやになり、どう考へても考へ直してもいやで、立ち切れず、去りとして自殺するほどの勇氣もなきは」と調子が変わり、次のように、冗談めかしつつも、厭世的な自らの死に対する憧憬の念を語るのである。

ああ正岡君、生てをればこそ根もなき毀譽に心を勞し無実の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁上より落つるも胆を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか。御文様の文句ではなけれど二ツの目永く閉ぢ一つの息永く絶ゆるときは君臣もなく父子もなく道徳も權利も義務もやかましい者は滅茶／＼にて、眞の空々眞の寂々相成べくそれを樂しみにながらへをり候。

手紙の末尾には「小生箇様な愚痴ッばい手紙君にあげたる事なし。かかる世迷言申すはこれが皮きり也。苦い顔せずと読み給へ」とあって、この気分がこれでおさまりそうにない予感があることがわかる。

しかし子規はこうした漱石の厭世気分にもともに向かい合おうとはしなかった。八月十五日付漱石宛書簡は「何だと女の祟りで眼がわるくなつたと、笑ハしやアからア、この頃の熱さでハのぼせが／＼よくてお氣の毒だね」とい、ハざるべからざる敵汗の時節、自称色男ハさぞ御困却と存候」と始まる。これは漱石からの二通の手紙に対して一度に返事したためであるが、二通目の手紙に対応する箇所も「二度目の御手紙ハ打つて變つておやさしいこと、……鬼の目に涙とハ」と冒頭と大差のない意図的にうわづった調子が続く。

「この頃は何となく浮世がいやで、立ち切れず」ときたからまた横に寝るのかと思へば今度ハ棺の中にくたはるとの事、あなおそろしあなをかし。最少し大きな考へをして天下不瓢不細「天下は大ならず、瓢は細ならず」といふ量見にな

らでハかなハぬこと也。けし粒ほどの世界に邪魔がられ、うち虫めいた人間に追放せらるゝとハ、ても扱も情けなきことならずや。南船北馬ハ愚か、難船落馬の間に日を送つたとて何の事かあらん。

子規は「人間の最期も一時代の最期も世界の最後も同じく両極中の一点にすぎざるべし。それを長いといふハ狭い量見也。短いといふも小さい見識也。悟れ君」と続けるのであるが、どう見ても気持ちの籠もった論論ではない。相手の深刻さをわざと軽くしか受け止めないつもりでいることを伝え、むしろ生きることと真面目に苦しむ姿を当人の認識の狭小さとして見下ろし、実際には自分たちでさえ立ててはいないある種の高みから共に笑い飛ばそうという態度である。

子規の手紙は、これまでのやりとりの戯けた調子の延長線上にあるともいえるが、そうなると、初めて書いた「愚痴ッばい手紙」だけでも「苦い顔せず」と末尾に添えた漱石の訴えを無視したことになる。無視しただけではない。これを「皮切り」に「世迷言」をこれからも聞いて欲しいという漱石の願いをこれ以上はお断りとはつきり拒んでいるのである。実際に死期を悟っている子規にとって、死を樂しみにながらへていくといった厭世的妄言は、相手の立場を考えない身勝手な甘えと映つたとしてもおかしくない。

八月下旬と思われる子規宛返信で漱石は「滑稽の境を超えて悪口となりおどけの旨を損して冷評となつては面白からず」と一頻り不平を述べた後、それでも自ら和解の手を差しのべている。

（悟れ君）なんかと呶鳴つても駄目だ。（狐禅生悟り）などとおつにひやかしたりして無功とあきらむべし。また理窟詰め雪隠詰めの悟り論なら此方も大分言ひ草あり。反対したき点も沢山あれどこの頃の天気合ひ、とかくよろしからず。攫み合ひ取組合ひ果ては決闘でもしなければならぬやうになるとどつちが怪我をしても海内幾多の美人を愁殺せしむるといふ大事件だから、一先づここは中直りをして置きましよう。

ここには子規との関係を決して自分からは断とうとしない漱石がいる。しかし、不満は消えていなかった。続けて元の軽い調子で「君が散々に僕を冷やかしたから僕も左の一詩を詠じてひやかしかへす也」として七言絶句「江山不浴俗懷塵 君是功名場裏人 憐殺病軀多客氣 漫將翰墨論詩神（江山浴るるや不や俗懷の塵 君は是れ功名場裏の人 憐殺す病軀客氣多く 漫りに翰墨を將て詩神を論ずるを）」を添えた。「俗懷塵」「功名場裏人」と書いてしまつては、申し出たはずの「中直り」も宙づりとなる。子規も漱石の怒りのほうをより感じたようので、直ちに八月二十九日付漱石宛書簡で次のように書いた。

御手紙拝見、藤耳に水の御譴責状ハ実ニ小生の肝をひやし候（ひやし也ひやかしにあらず）。君を褒姒視するにハあらざれど一笑を博せんと思ひて千辛万苦して書いた滑稽が君の万怒を買ふたとハ実に恐れ入つた事にて小生自ら我筆の拙なるに驚かざるを得ず、何ハともあれ失礼の段万々奉恐入候。犬の糞のかたきのとそんな心得ハ毛頭も無御坐人がひやかしたからひやしかへすの、ヤレ師弟の札を執るとももうく穴へでもはいりたき心地致し候。

冒頭はいかにも襟を正して謝罪するかに見せて、すぐにも以前の滑稽調に戻してしまう。しかし、これが子規なりの漱石への励ましなのである。彼は決して暗く沈んだ漱石に調子を合わせる事がなかった。

漱石は先の手紙で七言絶句の他に二十八句からなる詩（一句欠損）も添えていた。「仙人墮俗界。遂不免喜悲。（仙人俗界に墮つれば／遂に悲喜を免れず）」と始まるその詩は「嗤者亦泯滅。得喪皆一時。寄語功名客。役々欲何為。（嗤ふ者も亦た泯滅す／得喪皆一時／語を寄す功名の客に／役々何をか為さんと欲すと）」と結ばれるのだが、むろん「功名客」（名を求めめる人）は子規を指すのであろう。

興味深いのは、「君痾猶可癒。僕痾不可医。（君が痾猶ほ癒す可く／僕が痾医す可からず）」と自身の「痾」が治らないものだろうと自覚し、むしろ開き直っているような漱石の態度が、子規の返事にある二十六句からなる詩にも見られる点である。子規の右の手紙は、七言絶句に長詩を添える漱石書簡と同形式が採られている。それに「雄飛未得時。只余意気豪（雄飛未だ時を得ず／只余すのみ意気の豪なるを）」と書く子規は、式部や芭蕉の名前を挙げて、彼らが歴史に残るだけで誰もその仕事を継ぐことができないことを嘆き、「今世詩落地。不絶僅如糸。文章皆有病。其奈無良医」（今世詩は地に落ち／絶ゆざること僅かに糸の如し／文章皆病有り／其れ良医無きを奈んせん）と日本の文芸の決して確かでない現状を嘆き、「吾不与世移。避塵独守痴」（吾は世と移らず／塵を避け独り痴を守る）と記すのである。

二人の違いは明らかで、漱石の「痾」にはそれを抱えた自分の将来に展望がなく、子規の「痾」には自身が今後すべきことが、たとえば彼の後年の仕事につながる「月並」批判や「伝統」の批判的継承などが、くつきりとはなくとも、とにかくは見えている点であろう。むろんこの時点で二人にはそれぞれに「雄飛」をめざす若者らしい野心があったに違いない。しかし漱石も子規も「未得時」何ら《文学的価値のあるものはまだ何も書いていなかった》^{*21}。こうしたずれば、子規には差し迫った具体的な死期があり、漱石にはその焦燥が抽象的で宛てがないことから来るものなのかも知れない。しかし、だとすればそれだけに漱石の悩みはより深いとも言えよう。

あるいは漱石の「孤立」は、無闇な行いとなって顕れた。たとえば、「拜啓 昨夜又々持て余したる酒囊飯袋を荷ひてのそ／＼と帰京仕候」と始まる明治二十七年九月四日付子規宛書簡では、「三、四年來沸騰せる脳漿を冷却」するために「落付かぬ尻に

帆を挙げて歩けるだけ歩く」「旅行」に明け暮れるような無鉄砲な日々を「理性と感情の戦争益劇しく」「天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安心立命到底無覚束候」と記す。松島の瑞巖寺に詣でて「年來の累を一掃せん」として、しかし「到底見性の器にあらず」と参禅を諦め、すぐに今度は「南相の海角」に向い「日夜鹹水に浸り妄りに手足を動かして落付かぬ心を制せん」としたけれども、ただ「乱暴を致す」のみに終わったと漱石は報告している。

俗界に在て勉強が出来ぬ由御嘆息御尤もには御座候へども、学問の府たる大学院にあつて勉強すべき時間はないながら勉強の出来ぬは実心苦しき限に御座候。この三、四年來勉強といふほど勉強をした事なく常に良心に譴責せらるる小生の心事は傍で見るほど気楽な者には無之候。しかし申訳のため暇さへあれば終日机に向ふ処幾分か殊勝に御座候。この度も読もせぬ書籍を山ほど携帯致候段、我ながらその意を了解するに苦しみ候。ただ「シユレー」の詩集一卷は常にといはざれど時々あまり不快の時は繰り返し／＼或部分を熟読致し大に愉快を覚え候。

子規が「俗界」で「勉強」ができないことを嘆くのはもつともなことだが、学問の府である大学院にいる自分が時間があるのに勉強ができないのは本当に「心苦しき限」だと訴えている。この年十二月、鎌倉は円覚寺に釈宗演を導師として参禅するが、「安心立命」は得られずに終わる。

兎に角三年勉強して、遂に文学は解らずじまひだったので。私の煩悶は第一此所に根ざしてゐたと申し上げても差支ないでせう。／私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとう／＼教師になつたといふより教師にされて仕舞つたのである。（中略）私は此世に生れた以上何かしなければならん、と云つて何をして好いか少しも見当が付かない。私は丁度霧の中に閉ぢ込められた孤独の人間のやうに立ち竦んでしまつたのです。^{*22}

『私の個人主義』（大正三年）では、この後「同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、又同様の不安を胸の底に畳んで外国迄渡つた」。その留学先で「始めて文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自分で作り上げるより外に、私を救ふ途はないのだと悟つた」ことが述べられるのだが、参禅やジャパンメールへの就職の失敗から松山中学への赴任となる明治二十七年、二十八年は漱石が精神的にかなり不安定だった時期である。

彼は「異様の熱塊」（『道草』三）を胸のうちに抱えながら、何に注力してよいかわからず「妄りに手足を動かして」「乱暴」するほかになく、詩の一節だけが唯一の慰安であるような「陰鬱な」日々を懸命に生きていた。「孤立」は依然続いており、漱

石は抽象的な問題に煩悶したばかりでなく結婚や就職など世俗的な問題にも頭を悩ませた。

たとえば明治三十年四月二三日付子規宛書簡を見てみよう。

さて小生の目的御尋ね故、御明答申上たけれど、実は本人自らがいはゆるわが身でわが身がわからない位故、到底山川流に説明する訳には参り兼候へども単に希望を臚列するならば教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり。換言すれば文学三昧にて消光したきなり。月々五、六十の収入あれば今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覚悟なれど、遊んで居つて金が懷中に舞ひ込むといふ訳にもゆかねば、衣食だけは小々堪忍辛防して何かの種を探し(但し教師を除く)その余暇を以て自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書かん事を希望致候。しかるに小生は不具の人間なれば(後略)

この後の記述では、行政官、事務官、(帝国)図書館員の仕事なども、あちこち周旋を頼みつつも仕事がなく、あつても自分では務めが続きそうもないと愚痴をこぼしている。前年に熊本の第五高等学校へ赴任し、中根鏡と結婚したばかりである。漱石はいよいよ教師生活を已めて「単に文学的の生活を送りたきなり」「文学三昧にて消光したきなり」と訴えるようになった。この年、父直克が死去している。

四 正岡子規との距離(生来と教育)

漱石の「孤立」を一層深めたことの一つには、その嫂の死がある。まずは明治二十四年八月三日付書簡にある「嫂の死亡」(登世は七月二十八日死去)に関わる記述を見よう。そこから漱石が「生れ付」や「教育」についてどんな考えを持っていたかを探っていきたい。

実は去る四月中より懐妊の気味にて悪阻と申す病氣にかかり、とかく打ち勝れず漸次重症に陥り、子は闇より闇へ、母は浮世の夢二十五年を見残して冥土へまかり越し申候。天寿は天命死生は定業とは申しながら洵に「に口惜しき事致候。

わが一族を賞揚するは何となく大人気なき儀には候得ども、あれほどの人物は男にもなか／＼得やすからず、まして婦人中には恐らく有之間じくと存居候。そは夫に対する妻として完全無欠と申す義には無之候へども、社会の一分子たる人間としてはまことに敬服すべき婦人に候ひし。先づ節操の毅然たるは申すに不及、性情の公平正直なる胸懷の洒々落落として細事に頓着せざるなど、生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかど怪まれ候位、鬚髯髻々たる生悟りのえせ居士はとて及ばぬ事、小生自から慚愧仕候事幾回なるを知らず。かかる聖人

も長生きは勝手に出来ぬ者と見えて遂に魂帰冥漠魂帰泉只住人間二十五年「魂は冥漠に帰し魄は泉に帰る。只だ住む人間二十五年」と申す場合に相成候。さはれ平生仏けを念じ不申候へば、極楽にまかり越す事も叶ふ間じく、耶蘇の子弟にも無之候へば、天堂に再生せん事も覺束なく、一片の精魂もし宇宙に存するものならば二世と契りし夫の傍か平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと夢中に幻影を描き、ここかかしくかと浮世の羈絆につながる死霊を憐み、うたた不便の涙にむせび候。母を失ひ伯仲二兄を失ひし身のかかる事には馴れやすき道理なるに、一段ごとに一層の悼惜を加へ候は、小子感情の發達未だその頂点に達せざる故にや、心事御推察被下たく候。

ここには「節操の毅然たる」こと、「公平正直」なること、「細事に頓着せざる」と等々、漱石の理想とする人物像がはつきり描き出されている。そうしてとくに後半部分から伝わってくるのは彼の「孤立」である。添えられた悼亡の句十三句のうち「君逝きて浮世に花はなかりけり」「今日よりは誰に見立ん秋の月」などの句からもこの嫂がどれほど漱石の「孤立」を防いでくれたかが諒解されるのである。

さて、ここで注意したいのは「聖人」登世が有した「悟道の老僧の如き見識」が「生まれながら」のものであるかと疑われていることである。すなわち、彼女の「人物」が先天的なもの(生まれつき)か後天的なもの(教育あるいは経験など)かを問い、教育を受けておらず若く経験の浅い登世の場合、特異な例として前者と考えるほかにいだろうと漱石が見ている点である。

漱石が一般に人間の尊卑をその「生まれ」でもって判断することに否定的であることは、他の子規宛書簡からも窺える。たとえば子規が「気節論」を添えて、読むように薦めて送りつけてきた『明治豪傑ものがたり』に対する同二十四年十一月七日付の返書である。漱石はよほど腹に据えかねたのか、「明治豪傑譚」のような「かかる小供だましの小冊子を以て気節の根本にせよとてわざ／＼恵投せられたるは、つや／＼その意を得ず」とむしろ自身の憤慨を鎮めるためであるかのように懇切丁寧に反駁している。その中で武士の家に「生まれついた」子規の士族意識を相対化するかたちで自己の人間観を示すのである。

とにかく気節の有無などは教育次第にて、工商の子なりとて相応の教育を為し一個の見識を養生せしめば敢て士家の子弟に劣らんとも覺えず。暫らく気節は士人の手に落ち工商の夢視せざる処とするも、これは工商たるがために気節なきにあらずして気節を涵養するの時機に合せざりしのみ。試みに士家の子弟をとりて幼少より丁稚たらしめば数年を出ずして銅臭の兒とならん。君の議論は工商の子たるが故に気節なしとして四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞ゆ。君何が故かかる貴族的の言語を吐くや。君もしかくいはば、われこれに抗し

て工商の肩を持たんと欲す。

学校の成績では士族の子の多くは工商の子の多くに及ばないが、ひとたび学校を出たら工商の子は士族の子にひけをとることになると述べる子規に対して、漱石はまず統計的な根拠の有無を問い、ないのであれば、たとえば漱石のいた学校のように逆の例となる事実が提出されてしまえば、もはや議論の土台にするわけにいかないことを指摘している。そのうえで工商の子が劣るのは「学問の点」か「世渡りの巧拙」か「気節の点」かと問い、それぞれの場合について論駁していく。そして最後に、引用部分にあるように「気節の有無などは教育次第」であり、「四民の階級を以て人間の尊卑を分けるような「貴族的の言語を吐く」なら、自分はそれに対抗して「工商の肩」をもつと述べるのである。

生来のもとの教育によるものとの問題は、たとえば『坊っちゃん』の「おれ」であれば、「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかり」（一）というその「親譲り」の問題であり、「こんな土百姓とは生まれからして違う」（四）というその「生まれ」の問題である。漱石は自分が生まれ持った「性質」とのちに受けた「教育」を抱えながら、そこから生まれ出た「家」との距離をうまく取れずにいた。それが彼の「孤立」の一因であった。子規が「生まれ」にこだわったように、漱石は自身の受けた「教育」に自信があり、自負心の拠り所としていた。

彼は親類から変人扱いにされていた。しかしそれは彼に取って大した苦痛にもならなかった。

「教育が違ふんだから仕方がない」

彼の腹の中には常にこういう答弁があった。（『道草』三）

彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭だと主張して、気の弱い兄を苦しめた。（同三十六）

平生の彼は教育の力を信じ過ぎていた。今の彼はその教育の力でどうする事も出来ない野生的な自分の存在を明らかに認めた。かく事実の上において突然人間を平等に視た彼は、不断から軽蔑していた姉に対して多少極りの悪い思をしなればならなかった。（同六十七）

彼女の考えは単純であった。今にこの夫が世間から教育されて、自分の父のように、型が変わって行くに違いないという確信を有っていた。／案に相違して健三は頑強であった。（同八十四）

生憎細君の父は役に立つ男であった。彼女の弟もそういう方面にだけ発達する性質であった。これに反して健三は甚だ実用に遠い生れ付であった。（同九十二）

「教育」によって知識や見識を獲得すれば当然人は変わることになるが、そうした「教

育」では決して変えられない「野生」「性質」「生れ付」があり、それが『道草』にも描かれているところである。「生来」が必然や不変、運命や絶対といったものに近づき易いのに対して、「教育」は偶然や変化に道を開くものであり、また物事を相対化する力を得ることももある。相対化の対象は自己をも含む。漱石に自己の相対化が可能となるまでには、まだまだ時間が必要であった。

不思議にも学問をした健三の方はこの点においてかえって旧式であった。自分はそのために生きて行かなければならないという主義を実現したがりがら、夫のためにのみ存在する妻を最初から仮定して憚らなかつた。（『道草』七十一）

五 正岡子規との距離（功名と懐手）

最後に漱石と子規の人生に対する態度を見ておこう。子や兄の「ためにのみ存在する」母や妹を最後まで疑わずに最期を迎えた子規にとって、漱石的な自己相対化という意味での成長はなかつた。明治十六年に松山から東京に出るまでに彼にできるほどの成熟はすでに終えていた。「教育」というものが、様々な「生まれ」の異なる人間に対して「平等」に作用する側面や「生来」と「教育」とを弁証法的に捉えつつ人格的に自己を陶冶していくことなどについては、子規はついで真面目に考えたことがなかつたかもしれない。自分をすでに大人だと思つた子規はすぐに世に出たがった。大学はその方便であり、用をなさないとすればあっさり見限ろうとした。

明治二十四年、子規は哲学科から国文科へ転科したが、六月には学年試験を放棄し、落第の危機にあつた。追試が受けられるように漱石はあれこれと手を回したが、結果的には担当教員に受験を断られ子規の希望は叶わずに終わる。漱石は明治二十四年七月十八日付子規宛書簡で、子規が大学（本科）をやめて時期を見て選科に入り直すという案に賛成している。

御帰省後御病氣よろしからざるおもむきまことに御氣の毒の至に存候。さやうの御容体にては強いて在学被遊候とても詮なき事、御老母のみかは小生までも心配に御座候得ば、貴意の如く撰科にても御辛抱相成る方可然。人爵は固より虚栄学士にならなければ飯が食へぬと申す次第にも有之間じく候得ば、命大切と気楽に御修業可然と存候。

ここで注意しておきたいのは、位階や官禄のような人間が定めた社会的身分に汲々とせずとも食べていける、生きていけるといふ漱石の思想である。これは子規宛の最初の書簡の末尾にあつた「to live is the sole end of man」という言葉につながるもので

ある。

「賢人と愚人と別の別は学ぶと学ばざるとによりてできるものなり」「人は生まれながらにして貴賤・貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」*23と述べたのは『学問のすすめ』の福沢諭吉であるが、江藤淳は、小学校に入学した漱石が「たとえば次のような読本を習ったはず」とし、『小学読本』の次の一節を引用している。

人に、賢きものと愚かなるものとあるは、多く学ぶと学ばざるとに、由りてなり。賢きものは、世に用ゐられて、愚かなるものは、人に捨てられること、常の道なれば、幼稚のときより、能く学びて、賢きものとなり、必ず無用の人と、なることなかれ『小学読本』巻一、田中義兼編輯・那珂通高校閲、明治七年八月改正・文部省発行)

そのうえで『学んで「賢きもの」となり、有用の人になれば、淋しさも不安も、暗いさかいの声も、もう決して追いかけては来ない。……「成績優秀」な金之助は、こんなことを考えていたかも知れない』とし、この「必ず無用の人と、なることなかれ」を含む一節は『ほとんど金之助のこれ以後ロンドン留学までの生活の基調音を決定しているといつてよい』と述べている。一九六六(昭和四十一)年から雑誌に連載された漱石の評伝『漱石とその時代』*24においてである。

「必ず無用の人と、なることなかれ」は士族に「生まれ」、しかし早くに父を亡くし、以来「家」を背負うことになった幼き正岡子規の心こそ深く染み込んでいた。「猶期青史姓名垂」(明治二十三年、歳始書懐の詩)とはいえ、まずは日々の生活である。子規は母と妹を東京に呼び寄せたかった。子規の自己意識は「貴族的」なものだったかもしれないが、生活には余裕がなかった。キーン氏の言を借りれば『俳人としての収入で自分と母、妹を東京でなんとか養える方法があれば、子規は幸福であったに違いない。しかし、俳句で十分な収入を得る可能性は無きに等しかった。小説家になれば、もっと金になるかもしれないと子規は考えた』。

前年の年末に常磐会の寄宿舎を出た子規は二ヶ月後の翌明治二十五年一月に小説「月の都」を脱稿した。河東碧梧桐宛書簡に「小生当月ハ無一文」で小説の書き直しに必要なたった一本の筆さえ買えず「而シテ懐中余ス所一銭六厘也」と書いた同じ月である。子規は幸田露伴の『風流伝』を手本として「月の都」を書いた。そして露伴に原稿を読んでもらい批評を乞うた。

碧梧桐は自分宛の子規の書簡を引きながら書いている。『拙著は先づ世に出ることはない。はなかるべし』を句の体をなしているなど興がった余裕を見せているけれども、その奥底には絶望的な悲哀の潜むのを看過することは出来ない。言うまでもなく幾分の自信を持っていた創作なのであるから、もし露伴が推称の労を惜まなかったとすれば、

子規はこれを出版して世に問う勇氣を沮喪する所以はなかったのだ。露伴訪問の結果、その期待を抛擲せねばならなくなった、その当座の衷情は恐らく毒を飲むようでもあったであろう』*25。この年、母と妹を東京に呼び寄せた子規は俳句分類の仕事を始めている。

「この頃ハ僕が小説を書くといふことが新聞に出たさうだ。……これで僕ノ小説が出たら嘘から出た誠だね」(明治三十年二月一七日付漱石宛書簡)、「近來たのまれて小説とやらをものしをり候。昨夜もそれがために夜をふかし候処」(明治三十年九月一五日付漱石宛書簡)などののちの書簡からは、小説を書きたいという思いは生涯消えなかつたことが窺われる。しかし、子規は小説家として身を立てることには、一旦見切りをつけざるを得なかつたのである。

とはいえ、病を得て「世に用ゐられ」るための、したがって実際に「家」を興すための手段が限られてしまった子規にとつて、世間はどう思われようと、文学で身を立てる以外に道はなかつた。そうした事情は、たとえば明治二十八年に作られた漢詩「正岡行」にも窺える。

阿嬢在堂年五十	阿嬢堂に在り	年五十
鮮魚不薦帛不襲	鮮魚 薦めず	帛 襲ねず
妹年廿六嫁見去	妹 年廿六	嫁せども去てられ
裁衣煮菜家事助	衣を裁ち菜を煮て	家事を助く
吾素多病与世乖	吾素より多病	世と乖き
碌碌三十未迎妻	碌碌 三十	未だ妻を迎へず
阿嬢為兒憫孤寒	阿嬢は兒の為に	孤寒を憫れみ
兒為阿嬢悲無孫	兒は阿嬢の為に	孫無きを悲しむ
生不興家絶系譜	生まれて家を興さず	系譜を絶つ
死何面目見父祖	死して	何の面目あつてか
一任世人呼吾為猖狂	一に世人の吾を呼んで	猖狂と為すに任せ
只期青史長記姓正岡	只期す	青史 長へに姓の正岡を記せんことを

キーン氏は『これは子規の最も個人的な漢詩の一つで、他では触れていない家庭の詳細を語っている。ここには、子規が詩に不可欠であると考えた美の要素が欠けている。しかし最後の一行が示しているように、子規を取り巻く暗さにも拘わらず、自分の仕事で自分(ならびに正岡家)に一種の永遠性をもたらしてくれたいことを子規は願っている。この詩は決して冷たくないが、少なくとも母親に対する愛情の言葉があつてもいい。しかし子規は、おそらくそうした言葉を知らなかつた』*26と書いている。

私には子規の母親や妹に対する愛情が見える気がするが、それは「愛情の言葉」ではない。このように触れてこのように詩に書くことが彼の母や妹に対する愛情であつ

たのだと考える。そう言ってしまうれば、キーン氏のいう「愛情」とは言葉の意味が異なってしまうのかもしれない。十分な収入がなくても最晩年まで《母親も妹も食べたことのないような高価な食べ物を毎日欲しがる》*27のような我が儘や自愛と区別のつかない家長の家人への「愛情」である。しかしこの「愛情」ゆえに、「家」を興すことや正岡の「姓」を永遠に残すことが正岡家の跡取りである子規の切なる願いであったのであり、「家」に孫を残せない彼にとってその作品で名を（姓を）残すことはどうしても実現させなければならなかったことであった。

江藤淳の評伝から約五十年を経て、森まゆみは、英国留学から帰国し大学教員をやめ朝日新聞に入社し職業作家となる千駄木在住時代の漱石（明治三六〇四十年）と周辺の人々について綴った随筆を集めた著作のなかで、当時南京に赴任していた友人菅虎雄宛の明治三十六年六月十四日付の漱石書簡を引用してみせる。ここでは森氏の引用部分の後ろを少し伸ばして引く。

学問ナンカスルナ馬鹿気タモンサネ骨董商ノ方ガイ、ヨ僕ハ高等学校へ行ツテ駄弁ヲ弄シテ月給ヲモラツテ居ル夫デモ中々良教師ダト独リデ思ツテル大学ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツマケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク様ナコトハ教エルノガイヤダ、試験ヲシテ見ルニドウシテモ西洋人デナクテハ駄目ダヨ、近來昼寐病再発グー、寐ルヨ博士ニモ教授ニモナリ度ナイ人間ハ食ツテ居レバソレデヨロシイノサ大著述モ時ト金ノ問題ダカラ出来ナケレバ出来ナイデモ構ハナイ

「大著述」とはのちの『文学論』のことであろうか。小説ではなさそうである。ともあれ森氏は《遠くにいる親友に日頃の憂さを晴らしている感もあるが、これこそ漱石の本音ではなかったか》とし、鷗外と比べて漱石の《人生はなんと場当たりなのだろう》、《漱石は最晩年まで家を持たず、借家を転々とした》、また《名を挙げることも金持ちになることもそれほど興味がなかった》、《懐手して世の中を小さく暮らしたい。それが漱石の人生哲学であった》とするのである*28。

これはどういうことだろうか。かつて小林秀雄は『様々なる意匠』（昭和四年）で「批評とは、竟に己の夢を懐疑的に語る事ではないのか」と述べたことがある。二人の評家は、それぞれの文章で己を語っているだけということだろうか。漱石が「有用の人」になろうとした人であるのか、それとも「食ツテ居レバソレデヨロシイ」と考える人であったのか。こういう二者択一的問いは、それこそ無用であろう。「無用の人」となるなかれ」と、「食ツテ居レバソレデヨロシイ」は、矛盾する考えではないからである。

そして、これは経験と共に漱石が考えを変えたというより、どちらの考えも持ちながら、「有用の人」になることよりも、まずは生き延びることに優先して価値を置い

ていた、ということのように思われる。相対の人である漱石は二つの思想を併存させていた。子規との交流のうえで、漱石自身がやはり「功名場裏人」でもあっただけに、その「功名」の姿勢が友人の子規に見えずすぎたときには、勢い批判的姿勢をとることになったのだと思われる。

こうして見てくると、どうやら若き漱石に胚胎した思想は、形を変えながらも彼の生涯にわたって存続したように思われる。

六 正岡子規との別れ（結びに代えて）

子規は明治三十四年十一月六日付書簡を漱石に送った。よく知られた文言だがあらためて引く。

僕ハモ一ダメニナツテシマツタ、……イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カツタ。近來僕ヲ喜バセタ者ノ随一ダ。……君ノ手紙ヲ見テ西洋へ往タヤウナ氣ニナツテ愉快デタマラス。若シ書ケルナラ僕ノ目ノ明イテル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ（無理ナ注文ダガ）

この後も子規は一年近くを生きた。漱石は英国留学に際して、生きて再び子規と見えることはない確信していた。子規逝去を知らせてきた虚子高浜清に宛てた明治三十五年十二月一日付返書では次のように書いている。

啓。子規病状は毎度御惠送のほどゞぎすにて承知致候処、終焉の模様逐一御報被下奉謝候。小生出発の当時より生きて面会致す事は到底叶ひ申間敷と存候。是は双方とも同じ様な心持にて別れ候事故今更驚きは不致。只々気の毒と申より外なく候。但しかゝる病苦になやみ候よりも早く往生致す方或は本人の幸福かと存候。*29

そして「倫敦通信の儀は子規存生中慰藉かたゞ、かき送り候筆のすさび、取るに足らぬ冗言と御覽被下たく」と、この時点でも小説のような創作をして身を立てることなどはまったく考えられていない。末尾に「筒袖や秋の枢にしたがはず」以下悼亡の句五句を添えた漱石は、しかし子規追悼の文章を完成させることはできなかった。「水の泡に消えぬものありて逝ける汝と留まる我とを繋ぐ。去れどこの消えぬもの亦年を逐ひ日をかさねて消えんとす。定住は求め難く不壊は尋ぬべからず」と始まる文章は、次のくだりで中断している。

霜白く空重き日なりき。我西土より帰りて始めて汝が墓門に入る。爾時汝が水

の泡は既に化して一本の棒杭たり。われこの棒杭を周る事三度、花をも捧げず水も手向けず、只この棒杭を周る事三度にして去れり。我は只汝の土臭き影をかぎて汝の定かならぬ影と較べんと思ひしのみ^{*30}。

子規を失ったばかりの漱石の言葉は宙に浮いて、それこそ「定かならぬ影」のようにおさまりどころなく漂うばかりである。

『吾輩は猫である』中編自序(明治三十九年十月)には、子規について書かれた次のような言葉がある。

「書きたいことは多いが苦しいから許してくれ玉へとある文句は露伴りのない所だが、書きたいことは書きたいが、忙がしいから許してくれ玉へと云ふ余の返事には少々の遁辞が這入つて居る。」

「余は……とうとう彼を殺して仕舞つた。」

「季子は剣を墓にかけて、故人の意に酬いたと云ふから、余も亦「猫」を碼頭に献じて、往日の気の毒を五年後の今日に晴さうと思ふ。」

「余は未だに尻を持つて居る。どうせ持つてゐるものだから、先づどつしりと、おろして、さう人の思はく通り急には動かない積りでである」^{*31}

漱石は創作家(小説家)として立つことができ初めて、子規との別れができたのではないか。この仮説についての論証は、今後の課題としたい。

注

- 1 以下、『道草』からの引用は特に断りのない限り、夏目漱石『道草』(岩波文庫、一九九〇年四月)による。
- 2 『道草』の後半には「彼はある知人に頼まれてその男の経営する雑誌に長い原稿を書いた。それまで細かいノートより外に何も作る必要のなかった彼に取つてこの文章は、違った方面に働いた彼の頭脳の最初の試みに過ぎなかった。彼はただ筆の先に滴る面白い気分が駆られた」(八十六)、とあり、また末尾近くに「島田に遣るべき金の事を考えて、ふと何か書いて見ようという気を起し」「原稿紙に向つた」(百一)ともあり、全編にわたつて頻出する「赤い印気」に象徴される教師としての仕事の他に健三が著述を仕事として始める様子が描かれている。
- 3 正岡子規『子規全集』第九卷(初期文集)『木屑録』評(講談社、一九七七年九月)三八八頁。「余知吾兄久矣而与吾兄交者則始于今年一月也(余、吾が兄を知ること久し。而して吾が兄と交はるは、則ち今年一月に始まるなり)」という記述による。
- 4 夏目漱石『漱石全集』第二十五卷「談話『正岡子規』」(岩波書店、一九九六年五月)二七六～二七八頁。談話「正岡子規」(初出は『ホトトギス』、明治四十一年九月)では、「其頃僕も詩や漢文を遣つてゐたので、大に彼の一笑を博した。僕が彼に知られたのはこれが初めてであつた」とあり、漢詩を通じて知り合ったことが述べられ、実際については「非常に好き嫌ひのあつた人で、滅多に人と交際などはしなかつた。僕だけどういふものか交際した。一つは僕の方がえゝ加減に合はして居つたので、それも苦痛なら止めたのだが、苦痛でもなかつたから、まあ出来てゐた。こちらが無暗に自分を立てやうとしたら逆も円滑な交際の出来る男ではなかつた。(中略)彼と僕と交際し始めたのも一つの原因は、二人で寄席の話をした時、先生も大に寄席通を以て任じて居る。ところが僕も寄席の事を知つてゐたので、話すに足るとでも思つたのであらう。それから大に近よつて来た」と述べられている。
- 5 柴田宵曲『評伝正岡子規』(岩波文庫、一九八六年六月)親本は『子規居士』一九四二年三月)三一頁。「五月九日の夜、居士は突然咯血した。翌日は朝寝して学校へ行かなかつたが、医師の診察を受けただけで、午後は集會へ出るために九段まで行つた位だから、さほどの事とも思わなかつたのであらう。然るに同夜十一時頃再び咯血、それより午前一時頃までの間に、ほととぎすの句を作るに四、五十に及んだところ、翌朝またまた咯血した。子規と号するはこの時にはじまるのである」とある。なお、正岡子規「水戸紀行」(明治二十二年)には、無精で「薄着」のまま旅をしたせいで「ひた震ひに震ひしかども」「此船中の震慄が一ヶ月の後に余に子規の名を与へんとは神ならぬ身の知るよしもなければど」「『子規全集』第十三卷(小説紀行)(講談社、一九七六年九月)四〇一～四〇二頁)とあり、子規自身はこの薄着のまま寒さに震え続けたことが自分の結核の原因だと見ていた。
- 6 正岡子規『子規全集』第九卷(初期文集)『七草集』(講談社、一九七七年九月)一九四～二八八頁。『七草集』(明治二十二年)については、「七草にちなんで七つの章(蘭之巻、萩之巻、女郎花の巻、芒乃まき、薺のまき、葛の巻、瞿麦の巻)に分け、漢文、漢詩、和歌、俳句、謡曲、擬古文など、さまざまな形式で書いた詞華集」『漱石全集』第十八卷、訳注(『七草集』評)。また「この七篇に、子規自身が『七草の外』(七草集を讀ミ給へる君だちにまをす)とするとこの「かる萱の巻」を加えての、まことに多様性に富んだ全八篇である」(復本一郎『歌よみ人 正岡子規』(岩波書店、二〇一四年二月)などの記述がある。
- 7 正岡子規『子規全集』第十卷(初期随筆)『筆任勢』第二編(明治二十三年)「雅號」(講談社、一九七五年五月)。「雅號」には「此頃余は雅號をつける事を好みて自ら澤山撰みし中に「走兎」「風簾」「漱石」などのあるだけ記憶しぬれど其他は忘れたり」(三一九頁)、上欄に自注して「漱石は今友人の仮名と変セリ」(三二二頁)とある。また、柴田宵曲『評伝正岡子規』(岩波文庫、一九八六)には「松山時代一度用いたことがある」とある。
- 8 夏目「談話『正岡子規』」。そこには「つまり僕の方が人が善かつたのだな。今正

岡が元気でゐたら、余程二人の関係は違つたらうと思ふ。尤も其他、半分は性質が似たところもあつたし、又半分は趣味の合つてゐた処もあつたらう。も一つは向うの我とこちらの我とが無茶苦茶に衝突もしなかつたのであらうとある(二七七頁)。

9 以下、漱石書簡と子規書簡からの引用は特に断りのない限り、『漱石・子規往復書簡集』(和田茂樹編、岩波文庫、二〇〇二年十月)による。

10 ドナルド・キーン『正岡子規』第三章「子規の歌」(新潮社、二〇一二年八月)六三頁。

11 加藤楸邨『加藤楸邨全集』第一卷(俳句一)(講談社、一九八一年五月)一〇五頁。『寒雷』(都塵抄(昭和十二年(一九三七年)以後) 都塵抄六)「知友征旅」にある「自画像二題」と題した二句のうちの最初の一句。

12 河東碧梧桐『子規を語る』六「七草集」(岩波文庫、二〇〇二年六月)。碧梧桐は「この『七草集』を書いた時に、その桜餅屋の娘と子規との間に、或るローマンズのあつた事は、その後四、五年も経つて後に始めて聞いた。異性に対するローマンズというものを余り持たない、持たないというより殆ど絶無であつた子規の一生に、このエピソードは砂漠中のオアシスのような恵みを思わせる。松柏鬱蒼たる木の間の一本の花を偲ばしめる」(二九頁)と記しているが、子規生前に五百木飄亭らと当時すでに母親になつていた「おろく」に実際に会いに行つて確かめた印象では「子規は遂に恋というものを本統(注)原本の表記のまま)に体験しなかつたかも知れない。この秘密は私達もまだそれを解く鍵を持たないのである」(四〇頁)と否定的に見ている。

13 正岡子規『子規全集』別巻二(回想の子規一)(講談社、一九七五年九月)。大谷是空は「君は向島の長命寺内の桜餅屋の二階に下宿せられた。処が誰がいひ出したか其家の娘と関係でもあるやうに浮名が立つた。君は正直だけに此事を非常に気にして『七草集』と題する五六十枚もある小説的のものを書いて雪冤を試みられた」(この追悼記「正岡子規君」の初出は明治三十五年十月五日付「日本新聞」と述べている。また『漱石全集』第十八巻、訳注(『七草集』評)には「現行の『子規全集』は、『七草集』に対する諸人の評のあとに「刈萱のまき」の本文を添えており、子規がお花(お緑)との噂を否定するために書いた文章であることがわかる」とある。なお、注5でもふれた復本氏も、是空は限定していないが、子規が「雪冤を試み」たのは『七草集』全体によつてではなく外篇である「かる萱の巻」に限定してのものだったと見ており、妥当な見解であると思われる。

14 復本一郎『歌よみ人 正岡子規』第1章『七草集』の憂悶(岩波書店、二〇一四年二月)三八頁。

15 子規『木屑録』評。

16 正岡子規『子規全集』第十巻(初期随筆)(『筆まかせ』第一編、明治二十二年)「木屑録」(講談社、一九七五年五月)一一〇頁。引用は『筆まかせ抄』(岩波文庫、

一九八五年二月)による。

17 一海知義「訳注(『七草集』評)」、『漱石全集』第十八巻(岩波書店、一九九五年十月)四八七頁。

18 夏目漱石 明治二十三年一月初子規宛書簡。並びに正岡子規 同年一月十八日付漱石宛書簡。

19 栗津則雄『正岡子規』(講談社、一九九五)七五〜七六頁。

20 柴田『評伝正岡子規』三二頁。

21 キーン『正岡子規』第三章「子規の歌」六七頁。

22 夏目漱石『漱石全集』第十六巻「私の個人主義」(岩波書店、一九九五年四月)五九〜五九二頁。

23 福沢諭吉『学問のすすめ』(初編のみ小幡篤次郎との共著、一八七二年二月)ここの引用は『日本の名著33福沢諭吉』(中公バックス、一九八四年七月)による。

24 江藤淳『漱石とその時代 第一部』4「必ず無用の人と、なることなかれ」(新潮社、一九七〇年八月)五六頁。

25 河東碧梧桐『子規を語る』「十二 痛切な体験」一一九頁。

26 キーン『正岡子規』第八章「新体詩と漢詩」一七五頁。

27 キーン『正岡子規』第十一章「随筆『病牀六尺』と日記『仰臥漫録』」二二二頁。

28 森まゆみ『千駄木の漱石』「高等学校ハスキダ大学ハヤメル積ダ」(ちくま文庫、二〇一六年六月)四三〜四四五頁。

29 夏目漱石『漱石全集』第二十二巻「明治三十五年 書簡²⁵⁴」(岩波書店、一九九六年三月)二六四頁。

30 夏目漱石『漱石全集』第二十六巻「無題」(岩波書店、一九九六年一二月)二七八〜二七九頁。引用は『漱石・子規往復書簡集』(和田茂樹編、岩波文庫、二〇〇二年十月)による。

31 夏目漱石『漱石全集』第十六巻「序」『吾輩ハ猫デアル』中編自序「三四〜三五頁。付記 本稿は、平成二十八年度奈良工業高等学校公開講座「日本文学講座IX」第三回「作家以前の漱石—正岡子規との交流を中心に—」(七月二十六日実施)における講演をもとに大幅に加筆・修正したものです。作家以前の漱石にどのような思想があつたかについて、あらためて考える場を与えて下さった参加者の皆様に感謝いたします。